

■ 記憶色

りんごの色を尋ねられれば、普通かなり鮮やかな赤色が思い浮ぶであろう。(ただし、欧米人にりんごの色を尋ねれば、青りんごの色を思い浮べます。)あるいは桜の花の色はピンクでしょうか。このように熟知した対象物について記憶されている色のことを「記憶色」という。

(熟知した対象物の色について、イメージとして記憶されている色のことをである。)

記憶色は実際の色からのズレがある。一般には、実際よりもより鮮やかな色、より明るい色に変化する傾向、つまりその色らしさが強調される傾向が見られる。(一般に高明度、高彩度に記憶される。)

色相については、実際は黄緑系の植物が、記憶色では緑の方向にずれる傾向が見られるなど、基本色相の方向へのズレが指摘されている。また、記憶色が対象にとって好ましく感じられる方向に変化する傾向も見られる。日本人の肌の色は記憶色となると、実際よりもはるかに明度が高く、色白に記憶されている。(高明度、低彩度)

そこで、写真、印刷、テレビなどにおいて、よい色再現、好ましい色再現を行うために記憶色は参考にされている。

デジカメで撮った画像は、JPEG変換時に鮮やかな方向に色補正されて保存されています。

またその度合いは、メーカー任せです。安物のデジカメの方がその傾向は強いようです。

インクジェットプリンタの印刷も同様に、鮮やかに誇張されて印刷されます。

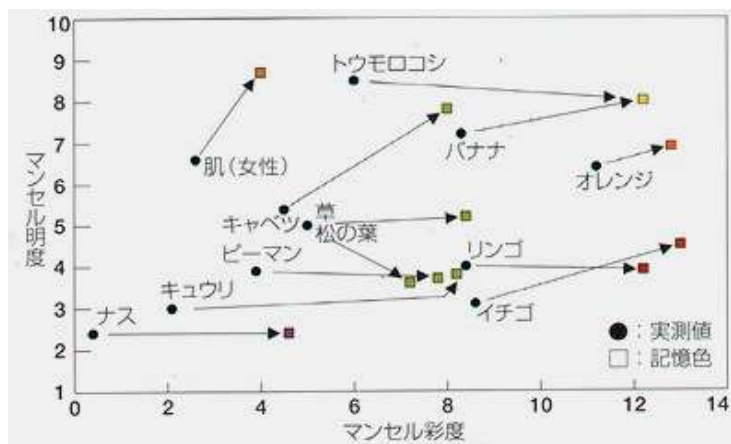


図18. 実際の色と記憶色(実験例) 出展:A・F・T 色彩検定 対策テキスト3級編 P73

【参考資料】

以前に、近畿大学生物理工学部 第12回公開講座(BOST Science Cafe)

『見る』ことと『見える』こと～視覚の不思議を解き明かす～ システム生命科学科 小濱 剛 講師
を聴講した時に、質問用紙で問合せしておいた回答を付けておきます。

〔質問〕 記憶色が鮮やかに記憶されるメカニズムについて教えてください。

〔回答〕 視覚システムは、眼から入った映像を色、形、運動、奥行きといった成分に分解し、それぞれ異なるルートで処理され、最後にそれらを統合する、という情報処理を行います。各情報処理過程では、本来の情報が徐々に概念化されて記憶されるに至ります。記憶を呼び起こす際は、この逆の情報処理がなされますので、概念化された情報にアクセスすることになります。そのため、実際に視たものよりもより鮮やかに感じるのかもしれません。

■ 色記憶

一方、ある色を被験者に提示し、しばらく時間を置いてから、多くの色の中からその色を選ばせると、元の色よりも明度と彩度が上昇する傾向が見られることが多い。

しかし色相についてはほとんど変化がみられない。これは「色記憶」と呼ばれる。

(製品の色や風景の色などを見て、その色を記憶すること。)

【参考文献】 A・F・T 色彩検定 対策テキスト3級編 P73